

園番号 814

令和7年度 奈良市立京西保育園 研究実践概要

園長名 辻 里香
全園児数 120名

1. 研究主題 「おもしろそう」「やってみよう」「またしたい」環境作り
～主体的にいきいきと遊ぶ子どもをめざして～
2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

2年間の研究の中で、子どもの遊びの姿から心の動きに視点を当て、それを支える環境との繋がりについて探ってきた。その中で、持続的に保育を省察すること、子どもの心を多面的に理解することが重要であるということが明らかになった。今年度は、継続してこれらを重ねていくことや、遊びを連続的に捉えること、遊びの中での課題や、人との関わりについて視点を広げ、環境との繋がりを探り明らかにしていく中で、主体的にいきいきと遊ぶ子どもの育成を目指してこの主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・ 自分のしたい遊びや、好きな遊びに取り組む子どもの姿を見取り、遊びの連続性もてるような物的環境や、人的環境を整えていく。
- ・ 日々の保育実践を振り返り、事例検証を通して子どもの心の動く瞬間を捉え、心の内面に視点をあてて考察し、明確にする。

②研究の重点

- ・ 子どもが「おもしろそう」「やってみよう」「またしたい」と考え遊び込むことができるような環境構成について考える。
- ・ 子ども心の動く場面を日々の保育の中で視点を当てて見取り、環境との繋がりや、人との関わりについて保育者間で考察する。
- ・ エピソード記録を保護者にも発信し、子どもの育ちや学びの共有を行えるようにする。

③活動の方法

- ・ 定期的なエピソード記録の作成を行い、会議にて「子どもの育ちや学び」と「興味や関心をもって遊ぶことができる環境構成」について討議し、共通理解を図る。また、子どもの心の動きに視点を当て、「何を楽しんでいるのか」「何に心を動かしているのか」などの心の動きを考察し、環境（人的環境、物的環境）との繋がりや要因を探る。
- ・ 子ども育ちや学びを、3つの資質能力との繋がり考察し、明らかにする。

エピソード1 0歳児 「ばあ〜!!」 10月

保育者の顔にかぶせたオーガンジーを「ばあ!」と言いながらはずすと、子ども達はじつと保育者の顔を見つめた。もう一度布を顔に掛けると、A児が嬉しそうに保育者の顔に手を

伸ばし、A児自身が布を取り、保育者の顔を覗き込んだ時に「ばあ！」という満足そうに笑っていた。繰り返し遊んでいると、B児も自分の顔に布を掛けた。保育者が「Bちゃんどこかな？」と声を掛けるとB児は嬉しそうに保育者の言葉を待ちながら「ばあ！」と勢いよく布を取った。その後、B児はA児の方を向き、布を顔に掛けじっと待っていた。保育者が「Bちゃんいないね、どこかな？」とA児に声をかけると、「ばあ！」とA児がB児の布を取り、二人は顔を見合わせて笑い合っていた。C児はお気に入りの猫のぬいぐるみを持ってきて、ぬいぐるみに布を掛け「ばあ！」と布を外した。保育者が「猫ちゃんにも、いないいないばあ、しているのね」と声を掛けると嬉しそうに「にゃんにゃん」と言い、繰り返し遊ぶことを楽しんでいた。

【考察】

0歳児にとってオーガンジーは、透けて相手の顔が見られるので安心して遊ぶことができる。布を出したときワクワクした表情を浮かべる子ども、初めてだったので少し緊張している子どももいた。まずは保育者が楽しみながら遊ぶことで、自分もやってみようという気持ちに繋がったと感じる。保育者が遊びの中で声のトーンや表情に工夫しながら関わることで、子ども達は保育者の言葉や動作を真似、自ら遊びに参加する姿が見られた。また、何度か遊びを繰り返す中で保育者対子どもであったのが、次第に子ども同士の関わりへと変化が見られ、0歳児なりの人への興味が芽生えていた。C児は、自分の経験したことをぬいぐるみにも経験させ、自分で遊びに向かう主体的な姿が見られた。日頃から保育者は一人一人の子どもの気持ちを受け止め、言葉を代弁しながら温かな気持ちで関わることで、子どもの安心した気持ちで遊ぶ姿や、人やものへの興味に繋がっていくと考える。

エピソード2 1歳児 「ぴょんぴょん」 11月

園庭でフープを持ち、回したり、転がしたりして楽しんでいる。保育者がフープを並べ両足跳びで跳んでみせると、興味を持ったA児が「いっしょに！」と言って、自分の持っていたフープを繋げ、同じように跳び始めた。「ぴょんぴょん」と、声を出しながらリズムよく跳んでいると、近くにいたB児C児も興味をもち、後ろから同じように跳び3人で楽しんでいた。次の日、昨日のことを覚えていたA児がフープを取りに行き「先生、いっしょに！」と言って、フープを繋げ始めた。B児もそれに気づき「いっしょにしよう」と言ってフープを繋げ、長いコースを2人でつくと「ぴょんぴょん」と声を出しながら跳び楽しんでいた。その様子を見つけた子どもたちが次々とやって来て遊びに並び始めた。

【考察】

保育者がフープの両足飛びをやって見せることで、子どもの遊びへの興味に繋がった。「ぴょん」と声を出しながら楽しそうに遊ぶ姿は、近くにいた子どもたちも「やってみよう」「おもしろそう」など、意欲を高めるきっかけとなったと感じる。また、その様子を見ていた子ども達も集まり、子ども同士の関わりが広がっていた。保育者は子どもの遊びを見守り、心の動きを捉えた環境構築を行ったことで、継続して遊ぶ姿へと繋がった。

エピソード3 2歳児 「ガソリン入れてくださいーい」 1月

子ども達が、幼児クラスのマラソン用の白線に興味をもったので、電車ごっこが出来るように白線で線路をかけた。段ボールで作った新幹線や電車、救急車などの車両を用意すると、乗りたい車両に乗って走り出した。コースの傍らに、ガソリンスタンド（兼充電器）に見立てたビールケースと蛇腹のホースを用意すると、それまで別の遊びをしながら様子を見ていた子どもも、友達の乗ってきた車両にガソリンを入れて参加するようになる。車役の子も、

「ガソリン入れて下さ〜い」と言って止まったり「次代わってね」と言って、ガソリンスタンド係と交代したりしながら、たくさんの子どもが加わってこの遊びを楽しんでいた。

【考察】

白線の線路がイメージをもちやすく、段ボールの車両も魅力的であったことが、子どもの「またやりたい」「もっと遊びたい」と主体的に参加する姿につながった。また、ガソリンスタンドのコーナーを出したことによって、走ることには積極的ではなかった子どもも、興味をもって遊びに参加することができた。車役の子どもとスタンド役の子どもの言葉のやりとりが生まれ、役割を交代しながら、遊びが広がっていた。線路（築山の後ろをぐるっと回るダイナミックなコース）、車両、ガソリンスタンドという環境の構築、そばで一緒に楽しんでくれる保育者がいることで、「何度もやりたい」「次は〇〇したい」と意欲的に遊ぶことができた。

エピソード4 3歳児 「お風呂みたい」 11月

A児B児は、落ち葉をタライに集め手や足を入れて感触を楽しみ「お風呂みたい」とうれしそうに言っていた。保育者は「足を入れたら足湯だね」と声をかけると、みんなで足を落ち葉の入ったタライに入れて楽しむ姿が見られた。室内では新聞遊びも楽しんでいたことから園庭に新聞を用意すると、“落ち葉のお風呂”“新聞のお風呂”ができあがった。A児B児C児がタライに入り、「気持ちいいな〜」と楽しさを共感しあう。保育者も一緒に入り、「温かいわぁ」と声をかけると、お湯をかける真似をする等、イメージを共有しながら遊んでいた。

【考察】

落ち葉をタライに集めた事で、安心して触れ、心地よさを感じながら遊びに向かう姿が見られた。毎日継続して落ち葉を増やしたことで、子ども達は「続きを楽しめる」という期待感を高め、遊びへの主体的な関わりにつながった。また、保育者が遊びの中に入り、言葉や動作で遊びの楽しさを共感した事で、イメージを広げ、安心して自分の思いを表現し、友達と関わりを深める姿に繋がっていた。新聞紙、ポリ袋、段ボール等の素材を段階的、意図的に用意したことで、「やってみたい」「使ってみたい」という気持ちを持ち、自ら考え、試しながら遊びを展開していく経験となった。

エピソード5 4歳児 「今日も転がししよう」 10月

数名が、トイをつなげたコースに、カプセルや、ゴルフボールなど素材の違うものを転がして遊んでいる。途中でコースがくずれてしまうと、保育者が修理をする様子を側で見ている。A児B児C児は毎日転がすコースを保育者と一緒に作ったり、修理をしたりして継続して遊びを進め、他児も巻き込みながら、トイがずれて落ちるところにすべり止めを置いたり、トイの重ね方（どちらを上重ねるか）などを考え、ボールが止まらない、最後まで転がるコースをつくりあげていた。「速くボールを転がすには傾斜を急にしよう」「曲がるコースを作りたい」などの遊びのめあてをもち、コース作りが進んでいた。作るコースもバラエティ豊かになり、遊びの面白さを友達と感じ合う姿が見られた。

【考察】

保育者も共に遊びを継続してきたことで、保育者の姿を真似て作ったり、壊れたコースを修理したりする姿が見られた。継続して遊ぶことで「こうしたらどうなるかな?」「もっとこうしてみたいな」「明日も続きをしよう」と自ら考え、試して発展させることができていた。思いを子どもだけで実現することはまだ難しいが、保育者の少しの援助のもと、やりた

いことをすすめていき、意欲的に遊ぶ姿に繋がっていった。

エピソード6 5歳児 「さあいくよ、えいえいおー！」 11月

園庭でアイドルごっこが始まった。A児は「曲順を書いたボードがあつたらいい」「舞台に飾りがあつたらかわいい！」など、いろいろなアイデアを出している。A児が「先生、大きな段ボール欲しい」と言い、保育者が「どれくらいの大きさがいるの？」と聞くと「アイドルが着替えているところ、見られたら恥ずかしいから壁にするの」と答えた。保育者が大きな段ボールを持ってくると、立てて壁にし、シートやハンガーラックで“アイドルの更衣室”を作った。衣装や小道具を持ってきては並べたり、ハンガーにかけたりしていた。“更衣室”の中では思い思いの衣装を身に着け、出番の準備をしている。友達と「やりあいっこしよう」と言ってお互いに髪飾りを付けあったり、リボン結びを得意な子に頼んだりしている。準備が整うとみんなで円陣を組み「さあ、行くよ！えいえいおー」と掛け声をかけ、ステージに向かう姿が見られた。

【考察】

様々な素材を使用し、自分がイメージしたものをつくる経験を重ねてきた事で、「もっと〇〇したい」「〇〇が欲しい」と、好きな遊びを実現するために必要な物を考え、素材を集めたりじっくり選んだりする姿が見られた。友達と一緒に協力して遊びを進める中で、更衣室や客席、ステージなど遊びに必要な場のイメージを広げ、主体的な遊びから協同的な遊びへと繋がっていた。また、つくることが得意なA児から刺激を受け、他児も同じように衣装などを真似して作ろうとし、素材を分け合ったり作り方を教えあったりと、関わりを深めて遊ぶ姿が見られた。遊びを通して友達の得意な部分を見つけ、認め合うことで自信をもち、友達と協力しながら意欲的に遊びに取り組む姿が見られた。

5. 研究の成果

- ・ 子どもの興味・関心やその時の心情を捉え、その心に寄り添った保育を展開するためには、保育者は子どもと共に遊びを楽しみながら「このまま見守りや助言で良いのか」「もっと環境を変えた方が良いのか」を考える事が大切であることが分かった。
- ・ 遊びの環境の構成と再構成の繰り返しにより、遊びが広がり深まっていた。またその連続性の中で、子ども同士の仲間関係が広がり、集団性や協調性が育ち、主体的な遊びの姿から協同的な姿へと繋がっていくことが明らかになった。
- ・ エピソードシートの作成から、実践の振り返りを行い「子どもは今、何を感じているのか」「何が楽しいのか」等を子どもの目線に立って考えたり、保育者自身が「自分はどうしたいのか?」「豊かな経験に繋がるにはどうすればよいか」と自分自身の思いや考えと向き合ったりすることで、実践の意味や価値について見出すことが出来ていたと考える。また、職員間での語り合いの場では、他者の考えや思いを聞くことで、多様な実践方法や新たな考えへの気づきを得る事ができ、子ども理解を深め、学びを通した同僚性の高まりに繋がったと考える。

6. 今後の課題

環境の構成と再構成についての視点をもった保育を振り返ることで、明日へ続く保育の展開を考えるきっかけとなっている。主体性をもった遊びの連続の中で子ども同士の関係が広がり、深まっていることが明らかになった。今後も保育者が視点をもった保育の振り返りを行い、実践の中での子どもの体験の意味や、情緒的育ちについて言語化していく学びを継続していくことが必要であると考えます。